

今、戦中・戦後のことを思うー2 (2009年4月22日公開)

大阪大学名誉教授 畑田耕一

本稿は畑田家住宅活用保存会年報No9 (2010) 8~11頁 (<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/nenpo9.pdf>)

掲載の論文、畑田耕一「今、戦中・戦後のことを思う」を、許可を得て、加筆・改訂したものである。

国民学校入学

昭和16(1941年)年4月、筆者は大阪府南河内郡丹比村の丹比国民学校に入学した。同年3月、国民学校令が勅令として出され、4月1日からそれまでの尋常小学校、高等小学校は国民学校と改称され、われわれ小学生は、児童・学童でなく「少国民」とよばれることとなった。そして、その年の12月8日、日本は、真珠湾攻撃に始まる大東亜戦争(太平洋戦争)に突入した。その日の朝、担任の先生が黒板に大きな字で「米英」と書かれたのを今も鮮明に覚えてはいるが、1年生の筆者には、この戦争の意味はよく分らなかった。

開戦当初は、ラジオや新聞は日本の南方戦線における赫々たる戦果を伝え、それによって得られた天然ゴムで作ったという軟式テニスのボールが、翌昭和17年の夏に、生徒に配られ、また、当時は貴重品であったゴム底の運動靴の特別配給があったりして、戦争に勝つとは有難いことだなど、思った記憶がある。因みに、その頃の小学生の履物は、主として下駄か藁草履であり、体操は裸足でやっていた。

戦中戦後の窮乏生活と生活の工夫

しかし、そんな有難い時期は、そう長くは続かなかった。昭和18年5月には米軍がアッツ島に上陸して日本軍は全滅した。この時から「玉砕」という言葉が使われるようになったのだと思う。それでも、日本の陸軍および海軍の最高統帥機関であった大本営は、多くの戦場での日本軍の赫々たる戦果を発表し続けたが、それとは裏腹に、日々の生活は少しずつ、窮乏していった。自転車、建具、金物、農業機械などを扱う技術者を除いて、大部分が農業を営んでいた筆者の村では、食べ物に困ることは無かったが、都会では、白いご飯が麦飯、お粥、雑炊と変化し、最後には、米粒の殆ど入っていない水のような雑炊となり、弁当箱は広口の空き瓶となって行った。

戦争に必要な食料の供給は、通常の田畑だけでは間に合わなくなり、荒地を開墾してサツマイモを植えるようなことも、銃後の国民の重要な仕事となり、われわれ「少国民」も授業を止めて、開墾に行く日が多くなった。そうして作ったサツマイモは、芋の部分だけでなく、蔓も「お浸し」にして食べるようになる。溜池のフナや鯉、家で飼っている鶏とその卵は貴重な蛋白源であったが、戦争末期には田圃で取れるイナゴも食べた。この様な食糧事情は、戦後もかなり長い間続いた。大阪市の四ツ橋に空襲の被災を免れてぼつんと建っていた電気科学館(現大阪市立科学館)でプラネタリウムの投影と洋画を見た後、持参した白いご飯で作った握り飯を、ものかげで、父と二人で、人に見られぬようこっそりと食べた記憶は未だに鮮明である。

物の不足は、戦争中も戦後も、食料だけではなく、あらゆるものに及んだ。夜の停電はしょっちゅうであった。乾電池のようなものは、殆ど入手出来なかった。灯かりはローソクに頼るしかなく、昔から家にあった龕灯(ガンドウ)が随分役に立った。これは、ブリキで作られた釣鐘形の外枠の中に、自由に回転す

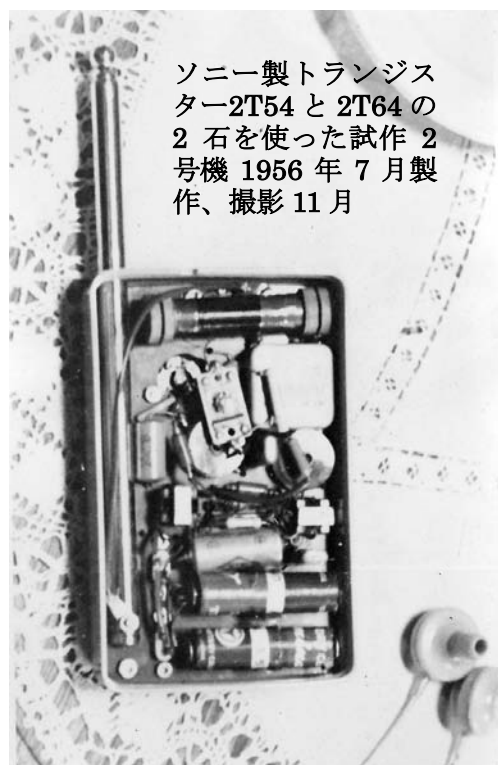


る錘つきのローソク立てを取り付けたもので、起き上がり子法師の原理を応用した提灯ともいえる。本体がどちらを向いていても、中に取り付けたローソクは上を向いていて、火が消えない仕掛けである。いわば、現在の懐中電灯である。子供の頃これに火をつけて、あちこちで暗闇を照らすのは嬉しかった。物資不足の時代に蝋燭を懐中電灯と同じように使えるのは感動的でさえあった。

戦争末期には、ローソクも貴重品となり、停電の夜は、ローソクは非常用として温存して、寝るしかなかった。マッチがなくなったときのことを想定して、火打石ともぐさで火を起す練習をしたりもした。「欲しがりません、勝つまでは」という標語があちこちに張られていた。

物の無い時代もまた幸せ

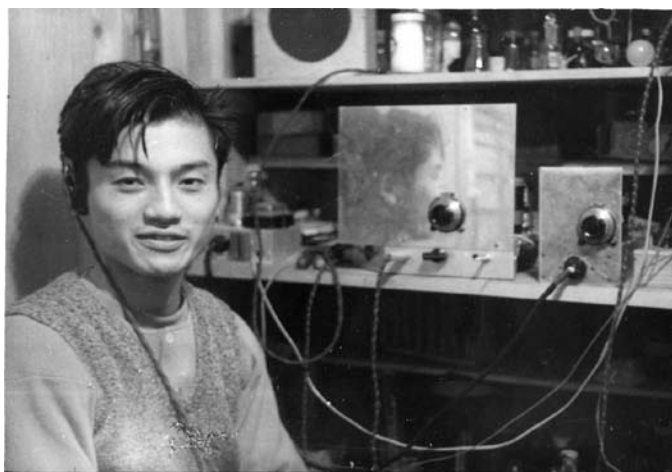
当時の真空管式ラジオを、停電時に電気無しで働かせることは勿論不可能であったが、幸いなことに、真空管式のラジオの前に使っていた、電気の要らない鉱石ラジオがあったので、それを使って、ニュースなどは聞くことが出来た。ここで、戦争末期におけるラジオにまつわるもう一つの話題を記しておく。それは、アメリカの放送である。この放送は、日本の大本営発表とは異なり、戦況の真実を伝えていたようである。それでは困るということで、その放送が聴取できる夜になると、訳のわからない妨害伝波が出されるようになり、夜になると放送が聴けなくなった。妨害電波の影響を避けて必要な放送を聴くには、可変コンデンサーとスパイダーコイルを組み合わせた高周波同調回路をつけることで解決できることが分った。龕灯（ガンドウ）の掃除もそうであるが、いわゆる機械ものに関する仕事は、父が出征中で、母と子だけの我が家では小学生の筆者の仕事であった。この頃の経験が、筆者を自然科学の道に進ませる切っ掛けになったと、今思っている。中・高校生の頃は、日本軍の放出物資の双3極真空管を使って作った短波ラジオで、外国放送を楽しんだ。大学に入って、5球スーパーヘテロダインのラジオや東京通信工業（現在のソニー）が日本で始めて製造した高周波トランジスターを使った小型携帯ラジオを作って、学費の足しにしたりした。ラジオを作るのに必要な計測器なども全て自作であったし、モーターを缶詰の空き缶とエナメル被覆線で作ったりして楽しんでた。望遠鏡や顕微鏡もレンズだけ



ソニー製トランジスター2T54と2T64の2石を使った試作2号機 1956年7月製作、撮影11月

買って来て、自作した。完成品をただ使うのではなく、自分で作って使う、それもキットを買って来て組み立てるといような作り方ではなく、自分で何をどのように作るかを決めて、材料を集めて作って使うと、そのものの作動原理が良く理解できる。物の無い時代の子供は幸せだったなど、今にして思う。

当時、秤といえば、棹秤か、その原理を応用した台秤が主流であった。我が家には100gから100kgぐらいまでのものを、それぞれ量ることの出来る秤がいくつかあった。医者伯父から貰





ったフェナセチンという風邪の特効薬を、小さな棹秤で一服分ずつ量って薬包紙に包むのは筆者の仕事であった。この棹秤の原理はきわめて明解で、小学生にもその原理はよく分ったし、これを一度でも使っておれば、学校の授業で出てくる梃子の原理は簡単に理解できた。学校の授業と日常生活との直接の結びつきは、子供の教育に非常に大事である。子供に日常生活で電卓を使わせるのが悪いとは言わないが、それと同時に、ソロバンや計算尺も使わせておく方が、物事の根本原理の分かる、あるいは、根本原理を探ろうとする人間に育つのではなかろうか。

戦争一色の生活の中で

ところで、戦況は上に述べたアッツ島玉砕の頃から次第に怪しくなってきた。それにもなって、学校の授業も次第に様変わりし、体操の時間には海軍の兵隊の体操を子供向けに作り変えた海軍体操なるものをやることになった。アメリカ兵が上陸してきたときの本土決戦のためにということで、薫人形を竹やりで突く練習や手榴弾を投げる練習も加えられた。航空兵になる訓練ということで、鉄あるいは木で作った大きな環の中に入って運動場を転がる訓練もあった。「行け大空へ、御国の少年」は「少年航空兵に応募しよう」と少年に呼びかける標語で、同じクラスの女生徒が何かの懸賞に応募して、入選したものであったと記憶している。まさに、戦争一色の授業であったが、体操の先生から、「皆が勢いよく足踏みをすると、地球の反対側に居るアメリカ人が地震かと驚くから、一所懸命やれ」といわれると、いくら子供でも「まさか」という気になったし、「敵が本土に上陸したときには、最後の一兵になるまで戦って国を守れ」といわれると、「それでは、最後の一兵が殺されたあと、日本の国はどうなるのだ」という考えが脳裏を掠めた。

そして、大都市へのアメリカの爆撃機による空襲が始まった。敵機が近づいてくると、先ず、警戒警報が発令され、さらに近くなると空襲警報となる。授業中に警報が発令されると、われわれは直ちに隊列を組んで家に帰って、庭に掘った防空壕に入る。警報解除で再び学校に戻る。そんな中で、上に述べた開墾に行ったり、草刈をしたりということもあって、4年生になるともう授業どころではなかった。ついでながら、この草刈は、農業の手伝いではなく、その草を粉にして戦闘機のパイロットが戦線に赴く途中で、居眠りをするのを防ぐために噛むチュウインガムの添加物にするのだということであった。物資の窮乏は極限に近く、「屁もまた燃えるものなれば、これを使わざるべからず」と言った陸軍の偉い人がいて、兵隊にサツマイモを食べさせて風呂に入れ、屁を水上置換で集め、屁の燃焼実験をしたところ燃えなかったので、尻から出た屁に直接マッチで火をつけようとしたが、やっぱり燃えなかった。でも、それでは実験台にされた兵隊が余りに可哀相なので、「燃えた、燃えた」と言って済ませたという話を、戦後に何かの本で読んだ記憶がある。この実験が失敗に終わった理由は、サツマイモの屁には可燃性成分が少ないためと思われるが、この実験が若し成功していたら、陸軍はどうするつもりであったのだろうか。戦争中の過酷な生活の中の、ユーモラスな一コマではある。当時の兵器の一つに風船爆弾というのがあった。気球に爆弾をぶら下げて上空に上げ、アメリカの上に来たときに気球がしぼんで、落下するという仕掛けである。その気球を作るための紙を貼り合わせる作業場がわれわれの学校からあ

まり遠くないところであって、貼り合わせ用の糊をわれわれの工作用に分けてもらったことがある。この爆弾は、屁を燃料にする実験よりは、ほんの少々効果があったようである。

筆者の住んでいた大阪府南河内郡丹比村は、先にも述べたように農業地帯の田舎で、都会の生徒が疎開してくるような場所であったので、警報は出ても、実際に空襲を受けることは無かった。一度だけ、警報で家に帰る途中、何かの理由で迷い込んだと思われる艦載機に襲撃されたことがある。爆音に振り向くと、風防メガネをかけたパイロットの顔が目飛び込んできた。とっさに、皆と一緒に堤防に伏せた。何発かの銃弾のうちの一発が、土に伏せた筆者の右手の近くを通った。このときだけは、「鬼畜米英」という言葉がパイロットの顔と重なった。

夜、大阪市が爆撃されるさまを遠望することが時々あった。焼夷弾が雨あられと降るさまは、さながら、花火大会のようであった。時たま、日本の高射砲の玉が打ち上げられるが、爆撃機の遙か下で破裂して全く効果が無い。高射砲の砲弾は、飛行機に当たらずにそのまま下に落ちてきたら、味方に爆弾を落としたのと同じ結果になるので、敵機の高さをあらかじめ測定し、その近くまで上がったときに炸裂するように仕組まれている。この頃は、そのような砲弾を作るのに十分な金属材料が既に無く、上空を飛ぶ B29 爆撃機に当たらないことは承知のうで打ち上げていたのだとは、日中戦争のときは中国で高射砲隊の隊員をつとめ、大東亜戦争のときは中部軍司令部に勤務していた父の話である。実際、戦争に使うので家にある宝石や金属は出来るだけ供出せよという御触れが出て、金属で出来ているものは蚊帳のつり手にいたるまで役場に持参したのを覚えている。

世界の平和のために勉強せよ

この様な状況のもとで、なお、日本が戦争に勝つとは、考えにくかった。それを口にするものはほんの少数であったが、筆者のまわりには居た。当時、大阪大学工学部の教授であった伯父は墜落したアメリカの飛行機の調査の結果から、これだけの技術を持つ国に日本が勝つことは不可能と断じていた。私立中学の先生をしていた祖父の弟は、新聞社のニューヨーク特派員をしていた頃の体験から、この戦争に勝つことの困難さを教壇から生徒に話し、周りの人たちをはらはらさせていた。それでも、戦後の日本の将来を案じ、それに備えるような能力は、10歳の小生には無かった。ただ、ただ、無いもの尽くしの日々を、いろいろな工夫をしながら、敵機の空襲を心配しつつ送っていた。そんな折、終戦の約2ヶ月前の梅雨の雨の日、周辺の国民学校の先生方を招いて、われわれ丹比国民学校の全校生徒による海軍体操の参観授業が行なわれた。雨の中でずぶ濡れになりながらの体操であった。全てが終わったあと、検閲に来ていた陸軍の中尉さんが壇に上がり、「君達は非常に上手な体操を見せてくれた。私は大変心強く思った。しかし、体操も大事だが、勉強も一所懸命にやってくれ。戦争が終わった後の世界の平和のために」と言われた。先生方には思いもよらない一言であったかも知れないが、体操はあまり好きでなかった満10歳の筆者は、兵隊さんがもっと体操をやれと言うのかと思っていたら、勉強しろと言われたので、大変嬉しかった。「平和のために勉強せよ」という言葉の意味は、正直なところよく分らなかったが、言葉そのものは、しっかりと覚えておいた。そして、後年、これがおそらくは日本が間もなく歩むはずの道をすでに見通していたこの中尉さんの、われわれ子供への必死の一言であったのだと思うようになった。終戦の2ヶ月前に、戦後の日本の進むべき道を、公開の場で子供たちに明確に示してくれたこの兵隊さんの言葉は今も忘れない。

今、日本人が考えねばならないこと

昭和20年8月6日広島に、9日長崎に原爆が投下され大きな被害が出た。これが並みの爆弾でないことは、すぐに分った。そして、8月15日の正午、昭和天皇による終戦の詔勅の録音が放送された。その内容は聞き取り難かったが、日本の無条件降伏で戦争が終わったことは、直後のアナウンサーの解説で

分った。戦争に負けたという無念さはあまり無く、やっと終わったという安堵感の方が大きかった。校長先生の「本当に残念な負け方をした」という朝礼でのお話は、空しく耳に響いた。

以上のようなことを、最近、小学校の出前授業で話すようになった。戦争を体験した先生が殆どおられなくなった今、このような話を子供達に伝えるのが自分達の使命と考えてのことである。子供たちは、これまで全く知らなかった世界の話を、皆一様に驚きながら聞いてくれる。「戦争はもっと大きな国が始めたものと思っていたら、日本が始めたと聞いてびっくりした」という意見も多いが、それよりも、殆どの子供が言うのは「何故、日本の国民は戦争をしてはいけないということを言えなかったのだろう」という疑問である。当時の日本の情勢を知らない子供たちにとっては、当然の意見ともいえるが、筆者は、それよりも、今の小学生は民主主義の根本が分っているのだと理解したい。その「民主主義の根本を大事に思う心」を何時までも持ち続けて、必要なときにはいつでも実践に移せる人間に育って欲しいと願っている。

米軍による原爆の投下については、いろいろな考えがあろう。ただ、今、筆者が強く思うのは、それは単なる結果論と笑う人がいるかもしれないが、日本があと 10 日早くポツダム宣言の受諾を決めていたら、原爆は落ちなかったのは間違いないということである。大量の非戦闘員にも、一瞬にして悲惨な運命をもたらすという悲劇は起こらなかったはずである。落とされた側は勿論のこと、落とされた側も、将来に亘って大きな不幸を背負うということは、避けることが出来た。戦闘員の被害も、戦争の早期の終結でかなり減らせたはずである。筆者の住んでいた丹比村郡戸は全戸数 100 足らずの小さな村落であったが、その約 20%の家の若者が戦争で命を落としている。

最近、筆者の生家である羽曳野市の畑田家住宅で催した文化フォーラムで武者小路千家の家元千宗守氏が、戦後かなり経って自分の父から聞いたこととして、大略次のような話をされた。「昭和 18 年のある日、近衛家所有の京都の陽明文庫の茶室で茶事をするので、1 人で手伝いに来ていただきたいという依頼が近衛文麿氏から父にあったそうです。会席もある正式の茶会なので、1 人でやるのは大変だなと思いつつ、それでも絶対 1 人でということなので、普段の何倍も苦勞して準備をし、当日のお客様を待ったということです。主客は昭和天皇の弟君である海軍におられた高松宮で、あとは、外務省の高官たち、ふすま 1 枚を隔てて聞こえてきた話の内容は、日本国は、どこの国を通じて、連合軍に降参を申し込むかという話だったということなのです。それを聞いて父は、絶対 1 人で来て欲しいと言われた意味がはじめて、よく分かったと申しておりました」と。

昭和 18 年というと、アッツ島の玉砕はあったとはいえ、国民の多くは、未だ日本の勝利を信じていた頃である。日本の上層部の人達が、ここまで状況判断が出来ていたのなら、もう少し早くに戦争を終わらせる手立てを講じて欲しかったと、痛切に思う。それは大変難しいことであったとは思いますが、努力して欲しかった。開戦の 5 ヶ月前、昭和 16 年 9 月 6 日の御前会議で、昭和天皇は外交による局面打開を強く要望され、「四方の海 みなはらからと思ふ世に など波風の立ち騒ぐらむ」という明治天皇の御製を読み上げられ、和平への希望を強調されたという記録がある。大権すなわち国土・人民の統帥権をお持ちの天皇の発言である。本来ならその趣旨に沿った外交交渉が進展し、開戦が阻止できればよかったのであるが、せめて昭和 18 年の段階で昭和天皇のこの発言に思いをいたし、早急な事態の打開が出来ておればと残念でならない。いま、われわれが、しなければならないことは、当時の天皇の大権に相当する権利と義務を持った国民の一人一人が、その能力に応じて、国の進路を誤らないために、真実の心の認識とその実践に努めることである。それが、かの陸軍中尉の「世界の平和のために勉強せよ」に応える道であると信じている。

戦中・戦後の生活から学んだもの

戦争が終わって、政治体制が変わっても、日常の窮乏生活はあまり変わらなかった。新しい教科書はなかなか出来ず、戦争中の教科書の都合の悪いところをスミで消して使ったりした。中学校の理科の教科書が全部揃ったのは、卒業直前の3年生の3学期であった。それで高校受験をしたのである。そんな物の無い時代に、先生や親からやかましく言われなくても自然に学べたことがある。それは「勿体ないの心」である。一粒の米でも無駄にしてはならない、本は隅から隅まで読む、そうでなければ勿体ないと思う。ものを大事にする「勿体ないの心」は自然に身についた。物を大事にするというのは、ものの命を大切にすることである。これは、当然のことながら、無機物の命だけでなく、動物・植物そして人間の命を大事にすること、最終的には、自分よりも偉大な存在に対する恐れ、畏敬の念をもって生きるという「勿体ない」の本来の意味に深く関わる心につながっていく。自分よりも偉大なるものの存在を忘れず、謙虚な気持ちで世界を眺めれば、周りの状況は正確に認識できるはずである。これは学びの場、ひいては人文、社会、自然科学とそれらに関わる技術の分野では、最も大事なことである。

一方、人間が生きていくうえの根源の力である道徳的能力の基本は、人間が他の人々や動物、植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断する能力である。この能力を身につけ、それを高めていくには、上に述べた物事を正確に認識する能力と自らの判断の検証が必要である。そのためには、人以外の動物、植物やものとのコミュニケーションが出来なければならない。人以外の動物、植物やものは人間の言葉をしゃべらないので、それらとのコミュニケーションは想像力に頼るしかない。道徳的能力の根源は想像力である（畑田耕一、林義久、澁谷亘 「道徳的能力と想像力」 <http://www.culture-h.jp/tohroku-osaka/dohtoku-sohzoh.pdf> (2009年2月5日公開))。工夫を自発的に行なうしかなかった物の無い時代にはこの想像力が自然に養成された。想像力は、また、人文、社会、自然科学の発展・深化の根源の力でもある。この分野に関連してよく使われる創造力は想像力の集積の結果を示す言葉である。しからば、戦中・戦後を生き抜いた人間は、「勿体ないの心」で世の中を正確に認識し、如何に生きるべきかを正確に判断できる豊かな想像力を持って育ち、道徳的にも科学的にもレベルの高い社会を築く能力を持っていたということになる。彼らが、科学的にも道徳的にもレベルの高い日本を築いたという判断が100%正しいかどうかの検証は別の機会に譲るとして、ここでは、今の物の溢れた時代に生まれた子供たちに、将来の日本と世界を背負わせるために、どのようにして勿体ないの心と豊かな想像力を養わせるかということについて、少し考えてみたい。

今、勿体ないの心と豊かな想像力を養わせるために、子供たちを物質的に窮乏状態に置くことは不可能に近い。しかし何かの方法で、少なくとも精神的な渴望状態を彼らの周りに作らないと、勿体ないの心や想像力の根源である工夫する心は生まれ難いような気がする。その方法を真剣に具体的に考えるのがわれわれ大人の務めではなからうか。戦中・戦後の話を伝えて、彼らに気付かせるのは一つの方法であろう。また、子供に興味を持たせるためと称して、親切に教えすぎたり、世話を焼きすぎるのも止めた方がよいと思う。受験勉強のごときは自分で工夫してするものであって、人に教えてもらうものではない。入学試験の問題を解くコツや要領は自分で工夫してこそ本当に面白く、身につくものである。面白くてよく分る授業がよくないとは言わないが、授業の先に、子供達がどうしても自分で考えなければ先に進めないような関所のある授業が必要なのではなからうか。どのような分野でもその根本原理は明解のように見えて、意外によく考えないと分からない問題を沢山含んでいる。初等教育にも、読み書きソロバンといわれる基本学習を終えたうえで、いくつかの分野の教育を、その根本原理から説き明かしていくような授業を考えてもよいのではなからうか。たとえば、化学を語るのに、子供が喜ぶ色の変わる化学反応など面白いことを沢山教えるのではなくて、いくつかの化学的現象を短く紹介したあとで、先

ず、物はすべて分子という小さくて目には見えないが、その物の性質の根幹となる粒子から出来ているという化学の根本原理を教える。その後で、たとえば、密度の定義を教えれば、単にそれにしたがって「5gの物質の密度が 1.1 g/cm^3 であれば、体積はいくらか」というような計算問題を解くだけではなくて、4.5gの10円銅貨を水に投げ込むとポチャという小さな音を残して水に沈むのに、45kgの木材を水に投げ込むと大きな水しぶきと音を立てるが水に浮いている、これは、10円銅貨、水、木材の密度がそれぞれ8.9、1.0、 0.9 g/cm^3 の順になっているからであるという密度と実生活との係わり合いを理解させたうえで、この様な密度の大小は何に起因するのかということ、子ども自身に考えさせるような授業をすることが出来る。実はこの様な授業を、大阪府豊中市内のある中学校でやってみた。そして嬉しいことに、密度の大小は、分子そのものの質量と分子のその物質中での集まり方によって決まるという考えを、子供達から引き出すことが出来た。この授業を行なうのにカリキュラムを大きく変える必要は無い。今の中学校の理科で、分子と密度の教える順番を逆にするだけでよい。この様な教え方をしておけば、小学生、中学生、高校生を対象にして筆者が行なったアンケート調査で、円周率の値はよく知っているが、その値が4と3の間にあることは証明できない生徒が大量にいるというような事態は避けられると思うが、如何であろうか。この様なほとんど予算の要らない改革で、子供達の学ぶ意欲を引き出し、「勿体ないの心」と想像力に溢れる国民に満ちた民主主義国家を作ることにも可能であるということ、を強調して、筆をおく。